

# 日本語教科書で観察される「かなと思う」

石井郁江

## 1. はじめに — 「かなと思う」表現とは—

「かなと思う」表現は、ブログや Facebook などのソーシャルネットワークサービス (SNS) でもよく見られる、耳にする表現であるが、若年層に見られる所謂「若者言葉」の一種ではなく、ニュース番組でのインタビュー場面、情報番組などでの専門家や識者のコメント、総理大臣や国務大臣といった政治家による会見の場といった、公共性の高い場面でも観察されている。

これらの場面で観察される「かなと思う」表現は、話し手の意見や見解などを述べる際に多く見られるが、本来、「かな」は疑問や独り言を表す表現 (文化庁1990, グループ・ジャマシィ1998) であるため、自身の見解などを述べるには適さないはずの表現である。それにも関わらず、現代の日本の社会では、「～と思う」という文の中で「かな」が使われることが多くなっている。下記 (1) (2) に、「かなと思う」表現の一例を挙げておく。

- (1) 「(20代~40代の女性たちが自殺を図り救急搬送される割合が多いということについて) そういう悪循環に陥る女性というのは、大変増えているのではないかなと思います。」(大学教授)<sup>1</sup>
- (2) 「(予測されている首都直下地震などに対する国の対応について) ここは強く要望したいかなと思います。」(国会議員)<sup>2</sup>

(1) の用例は、医師が医療分野の専門家として意見を求められた際に自身の見解を述べたものである。その道の専門家である医師が、「大変増えています」または「大変増えていると思います」と直接的な表現で自身の意見や見解を述べても違和感はないはずだが、「かなと思う」を文末に使い断定を避けている。

(2) の用例は、政府の委員会において、地震等が発生した場合の災害対策についての要望を委員の一人が示したものである。「強く」という発言からもわかるように、この件に関して、話し手の強い要望が示されているため、「強く要望します」「強く要望したい」と発言した方が適切のように思われる。しかし、「強く」という表現に反し、「かなと思う」を使って自身の要望をぼかしている。

このような「かなと思う」表現が、現代の日本社会で多用されるようになった背景には、断定的な表現を回避し、自身の発言に対する他者からの反発や批判を防ぐこと、言質を取られないようにしたいという、現代人の心理が投影されているからだとは私は考えている。インターネット等の通信形態が発達し、様々な情報が瞬時に拡散してしまう現代社会では、意図せず対人関係に摩擦を生じさせてしまう危険性があるからだ。それは日本語母語話者に限ったことではなく、日本人や日本の社会と接する機会が多い日本語学習者にも無関係とは決して言えない問題である。

しかし、従来の「かなと思う」表現の研究では、日本語教育と関連づけて報告された論文は見られず、「かなと思う」表現がなぜ使われているのかの理由を探るもの（小野2006）、何らかの専門性を有した人物が専門的な立場から意見や見解を述べる際の用法で使用されている「かなと思う」に焦点をあてたもの（鈴木 2014, 2015）などが中心であった。

日本語の授業でも「かなと思う」が扱われることはあまりないため、インターネットやテレビを通して耳にした「かなと思う」が、どのような発話意図を持っていて、どのような表現効果があるか理解することは日本語学習者には難しく、ましてや使用表現（実際に自らが使用する表現）とするのは困難だと考えられる。実際に、日本語が母語ではない日本語教師から、学習者が日本のドラマを通して耳にした「かなと思う」表現について質問された際説明に困った、という声を聞いたことがある。これは、最近よく観察される表現として、教師指導書に解説があれば説明に困るといった事態は回避できた問題だと言える。また、日本語教科書や日本語学習用の参考書に積極的に「かなと思う」表現が取り上げられていれば、学習者自身で解決することもできるだろう。学習者が日本人や日本の社会との接触場面において、「かなと思う」を理解していないことで生じるかもしれない誤解や批判を避けるためには、日本語教育の現場でも学習項目の一つとして「かなと思う」を扱うことが望ましいと考える。そのためには、「かなと思う」表現の使用場面や表現効果が理解できるような教科書構成や参考書の充実が求められる。それによって、学習者が不利益を被ったり、表現が理解出来ずに戸惑ったりする事態を回避できるだろう。

本研究では、先行研究では見られなかった、「かなと思う」の表現類型を整理し、日本語教科書で観察される「かなと思う」表現との比較を試みることによって、「かなと思う」表現を積極的に日本語教科書で取り上げる道を探ることを目的としている。また、学習項目の一つとして取り上げる場合、どの段階でどのような用法を積極的に提示するべきか、「かなと思う」表現を日本語教育に応用するための提案を試みる。

## 2. 「かな」「と思う」「かなと思う」の記述

まず、「かなと思う」を観察する上で問題となる「かな」「と思う」について、日本語教育関連の参考書または先行研究にて記述を確認する。その上で、「かな」「と思う」が結合した形式である「かなと思う」を扱った先行研究を見ていく。

### 2.1 「かな」に関する記述

終助詞「かな」が持つ働きについて、日本語教育関連の参考書や指導書、そして先行研究では、下記のように記述されている<sup>3</sup>。（引用例文にある下線は石井によるものであり、とくに示したい

部分に下線を引いた。)

(3) 『外国人のための基本語用例辞典』(1990：p210)

- ・疑問の意味を表す。話しことばで使う。
- ・自分の疑問の気持ちをひとりごとを言うように表す場合に使う。
  - 先生はきょう休みかな。
- ・相手に質問する意味を表す。男の人のことば。
  - 山田さんの住所を君は知っているかな。

(4) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(2001：p263-p264)

- ・命題の真偽について話し手が疑いを持っていることを表す。
  - 明日も雨が降る(の)かな。
- ・独り言でも使える。
- ・「かな」は基本的に独り言で使われるものであり、聞き手の存在を前提としない。

(5) 『日本語文型辞典』(1998：p81-p82)

- ・自分自身に問いかける気持ちを表す。くだけた話しことば。
- ・ひとりごとで、不思議に思う気持ちや疑問の気持ち。
- ・聞き手に向けられた時は疑問の表明、遠回しに許可を求めたり依頼したりする。

(6) 三宅知宏(2000：p8-p21)

- ・「かな」の本質的な意味は、疑問内容を検討中であるということの表明、すなわち「疑念表明」だとし、通常の質問文とは異なり、聞き手への直接的な回答の要求は持っていない。
- ・「かな」には、「弱い質問」や「丁寧さの加わった質問(和らいだ表現)」という意味も含まれている。

(7) 平山紫帆(2015：p68-p79)

- ・「かな」は自然な会話においては、「疑いの述べ立て」で使われる場合が最も多く、実際に判断が不成立である場合や、相手と異なる主張あるいは相手への批判的意見を述べる際に「かな」が用いられている。
- ・また、相手に同意できない場合に自身の発言を和らげるために「かな」が観察される。

(8) 熊野七絵(1999：p31-p41)

- ・普通体の「かな」と丁寧体の「かね」には対応関係がある。そのため、「かね」は、普通体で「かな」に言い換えることができる。
- ・「かな」も「かね」と同様にひとまとまりの表現として「疑いの表現」に位置づけられる。

上記で示したように、「かな」は疑問やはっきりしないことを表すとき、あるいは独り言で多

く使われ、基本的に聞き手の存在を前提としていない表現であることがわかる。しかし、(5)で示したように、聞き手に向けられる場合も存在し、その場合は、相手に遠回しに許可を求めたり依頼したりする表現になり、聞き手に対する配慮が加わる。それが(6)(7)で指摘されている「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」、あるいは「自身の発言を和らげるため」といった配慮表現に繋がるようだ。また、「かな」は「かね」と同様の機能を持っていることも(8)では報告されており、普通体の「かな」と丁寧体の「かね」は言い換えが可能であることが指摘されている。従来の研究では、「かなと思う」の表現類型について報告したものがなかったため、本研究では、(8)で示した熊野(1999)の「かな」の表現類型を参考に、「かなと思う」の分類を行うことにした。詳しくは後述する。

## 2.2 「と思う」に関する記述

次に、「と思う」について、日本語教育関連の参考書や指導書、そして先行研究からその記述を確認する。(2.1同様、下線は石井によるものであり、とくに示したい部分に下線を引いた。)

(9)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(2000:p123-p124)

- ・「だろう」は話し手の考えを断定しない(非断定)で述べるときに使うが、「と思う」もほぼ同じ意味で使うことができる。
- ・話し手の個人的・主観的な考えを明示するための表現であり、客観的な情報を示す必要がある場合や論文などには適さない。
- ・日常の話しことばで話し手の考えを述べる場合には、「だろう」単独の形は使いにくいいため、「だろうと思う」や「と思う」がよく使われる。
  - 図書館にいる {?でしょう/○と思います/○だろうと思います}。

(10)『中上級を教える人のための日本語ハンドブック』(2001:p197)

- ・話しことばでは断定を避けるという意味で主観性を低める表現。

(11)『談話表現ハンドブック』(2005:p375-p376)

- ・真であると断定出来ない場合、その認定を保留した方がいいという判断を示す。
- ・意見の衝突を未然に防いだり、常に逆の立場にも立っているという態度を示せる。

(12)横田順子(1998:p101-p118)

- ・「思う」は本来、心の働きを表す動詞である。
- ・「思う」が頭の働きを表す場合に用いられる場合は、「個人的な意見を述べる」あるいは「個人のある判断を表す」際に使われ、少々遠慮した気持ちをもって自分の考えを表明する場合に見られる。

「と思う」は、話し手の考えを明示するためだけではなく、(10)(12)の記述に見られるように、断定を避けることで主観性を低めたり、(11)のように意見の衝突を未然に防いだりする機

能を持っている。話し手の主張をぼかすことによって、自身の発言によって生じるかもしれない他者との摩擦を和らげたり、自身に向けられる批判を防いだりする効果が「と思う」によって期待できる。

では、「かなと思う」表現との関連から見た場合はどうだろう。ここで見たように、「と思う」単独で自身の発言をぼかしたり、断定を避けたりすることができるのなら、なぜ「かな」「と思う」の2つを組み合わせた「かなと思う」表現が頻繁に観察されるようになったのか。本稿では、その点についても考察を試みる。

### 2.3 「かなと思う」に関する先行研究

次に、本研究の中心となる「かなと思う」について触れる。「かな」や「と思う」について報告されたものは多くあるが、「かなと思う」を一つのまとまった表現として研究したものは少なく、小野（2006）、鈴木（2014, 2015）、あるいは渡邊（2010）の一部で見られる程度である。

小野（2006）は、「かなと思う」がなぜ使われているのか、「かなと思う」表現が持つコミュニケーション上の機能とは何かについて、話し手の思考判断の機能を持つ「内的活動」と、聞き手への働きかけ（伝え方）の「外的活動」という2つの観点からアプローチしている。小野が示す「内的活動」と「外的活動」について、下記（13）に用例を示して補足する（用例は小野2006から下線含めて引用）。

- (13) 「(違反を犯した) 監査法人に刑事罰を導入するというアイデアについては、社会的影響度の大きさを考えると罰則があってもいいかなと思う」

「内的活動」「外的活動」の2つの観点から（13）の用例を見てみると、「かなと思う」形式をとる場合、「内的活動」では、話し手の「罰則があってもいい」という発話は、あくまでも「個人的な見解」であることを示している。そうすることによって、この話題に関係のある人物や組織への配慮、他の意見に対する配慮を示そうとしているのである。また、「外的活動」としては、話し手の聞き手に対する伝え方に焦点があてられ、自身の発話をもたらす「社会的影響の大きさ」に配慮し、強い意志表明を避け、やわらかい印象を与えようとしている。「かな」または「と思う」単独の表現ではなく、「かなと思う」が選択される要因はここにあるように思われる。

「かな」単独では、独り言の要素が強く、求められた意見や見解を述べるには、やや心許ない。「と思う」単独の場合は、「かな」とは異なり、自身の意見を述べる表現として適しているが、聞き手への働きかけは強くなる。もちろん、「罰則があってもいい」という形式より、「罰則があってもいいと思う」の方が、主観性を低めた言い方であるため、聞き手へ与える印象も弱まるが、現代社会では、自身に向けられる批判を防ぎたいという心理が無意識に働いている。そのため、自己防衛および聞き手に対する伝え方の配慮として、より聞き手への働きかけを弱めようとし、「かなと思う」が選択されるようになっていないかと私は捉えている。そういった点に、「かなと思う」の意味用法上の特徴が見られるのではないだろうか。

小野（2006）は、「かなと思う」を新しい日本語の一つとして取り上げたこと、その新しい表現である「かなと思う」に配慮や和らげる効果があると指摘し、聞き手への伝え方にも注目した

点が、従来の研究にはなかった点である。しかし、量的な研究はされていないため、「かなと思う」の使用率や使用実態および「かなと思う」が「と思う」に代わって選択される意味については言及がなかった。

小野（2006）では詳細には触れられていなかった「かなと思う」の使用実態については、鈴木（2015）でその記述が見られる。鈴木（2015）では、1976年～2005年までの国会会議議事録データを用い（BCCWJのコーパス検索システム「少納言」を利用）、「かなと思う」の使用例の抽出を試みた。それによると、意見・コメントで用いられていると思われる用例は、1970年代で1例、1980年代で5例、1990年代で22例、2000年代で24例観察された。国会会議で見られる意見を表明する「かなと思う」には、聞き手との衝突を避けるための戦略があり、他者との対立を生む可能性を避け、自分自身の心理的負担を軽くするという機能を持っていると鈴木は指摘している。

鈴木（2015）は、コーパス検索システムを使って量的に観察した点、そして意見で用いられている「かなと思う」に焦点をあてて論じた点が、小野（2006）といった従来の研究とは大きく異なる点であり、「かなと思う」研究を発展させたといえる。しかし、意見で用いられている用例だけに焦点をあてていたため、「かなと思う」には他にどのような用法があるのかといったことは把握できない。「かなと思う」を日本語学習の学習項目として取り上げることが視野に入るのであれば、「かなと思う」にどのような用法が見られるのか、最も多く使われている用法は何かを明らかにする必要があるだろう。本稿では、「かなと思う」表現の全体像にも迫る。

### 3. 「かなと思う」表現の使用実態

2節で触れたように、従来の研究では、国会議事録を用例検索に用いているものが中心であり、広く一般で観察される用例の使用数については言及が少ない。本稿では「かなと思う」表現がどの程度観察されているのかを見るために、コーパス検索システムである「中納言」を用いて、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」の用例を抽出するとともに、先行研究では行われていない「かなと思う」表現の類型分類を試みる。

#### 3.1 「かなと思う」の使用度数

「かなと思う」は、「（かなと思）います」「（かなと思）うんです」など、「かなと思」に後接する文が多様にある。そこで本研究では、このような「かなと思う」の派生形を含めて観察対象として扱い、後接文を限定しない「かなと思」で用例検索を試みた。また、「かなと思う」には、「かなとおもう」や「かな、と思う」などの形式も見られるが、このような形式については本研究では扱わず、「かなと思」の形式で抽出できる用例のみを扱い、他形式を含めた使用度数の推移は、今後の調査研究課題とする。

「かなと思」で検索した結果、1280例の「かなと思う」表現が抽出できた。そして、抽出された1280例の「かなと思う」表現を年代ごとに分類したところ、下記図1に示したような使用数の推移が見られた<sup>4</sup>。

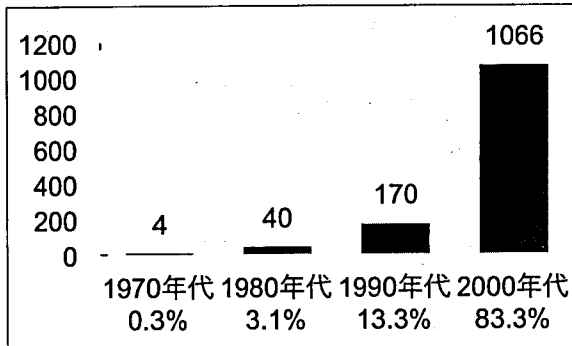


図1：文末に限定しない「かなと思う」の使用数

「かなと思う」の使用数の推移を見ると、1970年代ではわずか4例だったのに対して、2000年代になり1066例にまで使用数が増えた。調査に用いたBCCWJは、2000年代以降でブログや知恵袋といった新たな収録ジャンルが追加されたため、使用数の増加には追加された新ジャンルの影響も考えられる。そのため、新ジャンルの影響がどの程度あるのか確認したところ、1066例中634例が新ジャンルで観察された用例であった。しかし、新ジャンルの影響を考慮したとしても、「かなと思う」表現の使用数が増えていることには違いない<sup>5</sup>。

### 3.2 「かなと思う」の表現類型

次に、「かなと思う」表現の用法について見ていく。「かなと思う」を扱った先行研究（小野2006、鈴木2014、2015）では、「かなと思う」の表現類型については詳細には触れられておらず、意見や見解を述べる際に見られるといった説明に留まっている。そこで本稿では、BCCWJで抽出した「かなと思う」の用例を用い、「かなと思う」表現の類型分類を試みると同時に、それぞれの出現回数をカウントした。

先述したように、「かなと思う」を表現類型別に分類した先行研究はないため、本研究では、既存する「かな」の表現類型を参考に「かなと思う」の分類を試みた。その際に用いた「かな」の表現類型は、2節で挙げた熊野（1999）の表現類型<sup>6</sup>である。表1に、本研究で分類した「かなと思う」の表現類型を用例と共に示す。

表 1:「かなと思う」の表現類型

表現類型	「かなと思う」形式
提案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の頃から戦争をしないように学ぶことが大切かなと思います。</li> <li>・何か象徴的なものを舞台にひとつおくだけでもいいかなと思います。</li> </ul>
依頼	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたについていってもらえないかな<u>と思</u>って。(用例数が少ないため 1 例のみ提示)</li> </ul>
意志	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夫婦で旅行に行こうかな<u>と思</u>っています。</li> <li>・スポーツジムでトレーニングでも始めようかな<u>と思</u>っています。</li> </ul>
願望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・僕を傘に入れてくれるんじゃないかな<u>と思</u>ってね。</li> <li>・何とかならないのかな<u>と思</u>います。</li> </ul>
疑い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・彼の言葉はどこまで本音なのかな<u>と思</u>うことがある。</li> <li>・みんなどうしてるのかな<u>と思</u>って。</li> </ul>
納得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私もそのほうがいいかな<u>と思</u>って</li> <li>・そう言われればそうかな<u>と思</u>う</li> </ul>
判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>・借り主だけの署名、捺印でいいのかな<u>と思</u>っているのですが</li> <li>・黙っていた方がいいのかな<u>と思</u>います。</li> </ul>

熊野 (1999) の分類では、「命令、勧め、依頼、誘い、意志、願望、疑い、納得、判断、情意」の10項目が挙げられていたが、本研究では、BCCWJ での使用が認められなかった「命令、勧め、誘い、情意」の4項目を除外し、先行研究で言及されることの多かった話し手の意見や見解などを表す「提案」を追加した。

表1の表現類型を基に、BCCWJで観察された「かなと思う」1280例のうち、用例の一部である247例<sup>7</sup>を対象に分類を試みたところ、下記図2に示したような結果が出た。この結果を見ると、提案で使われている用例が多いことがわかる。これは、提案が他者に働きかける機能を含んでいるためであると考えられる。他者へ働きかけをする場合には、摩擦や衝突を生まないためにも、相手への伝え方に十分配慮する必要があるからだ。また、本研究で分類した247例の中には、依頼の用例は観察できなかったが(図2)、247例以外の1033例の中には、依頼の用例も観察できたため表1に示した。(本稿では、BCCWJの分析が主な目的ではないため、詳細な分析はここでは触れない。)

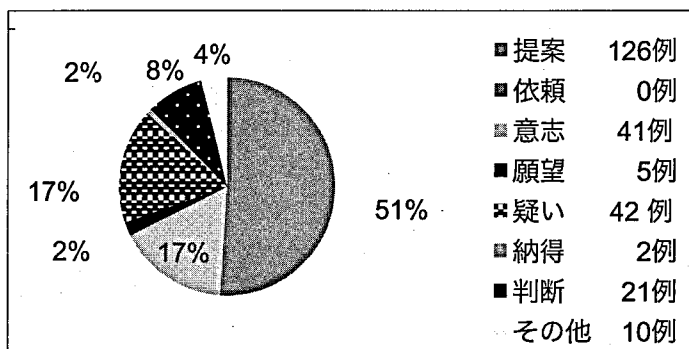


図 2: 「かなと思う」表現類型ごとの使用数



#### 4. 日本語教育関連教材で観察される表現

3節では、「かなと思う」の表現類型の分類を試みた。それによると、「提案」「疑い」「意志」の使用数が高いことがわかった。では、初級学習段階では、どのような表現が学習項目として示されているのであろうか。4節では、初級の学習項目として提示されている「提案」「疑い」「意志」について確認していくと共に、中級以降で見られた「かなと思う」表現の用法について明らかにする。

##### 4.1 初級で見られる「提案」「疑い」「意志」を示す表現形式

初級で扱われている「提案」「疑い」「意志」の表現を確認するにあたって、台湾で広く使われていると思われる『大家的日本語』『新文化初級日本語』を比較対象として用いた。両教科書とも版權を得て台湾地区用に発行・出版された教科書であるが、内容および課数は日本で出版されているものと変わりはない。表2は、日本語教科書で見られる「提案」「疑い」「意志」の初出課についてまとめたものである。

表2：「提案」「疑い」「意志」を表す表現の初出課

表現類型	大家的日本語 (全50課)	新文化日本語 (全36課)
提案（意見や見解など）を表す形式	21課	13課
疑問・疑いを表す形式	1課	1課
意志を表す形式	31課	20課

表2について、『大家的日本語』を例に、もう少し見ていこう。『大家的日本語』では、話し手の提案（意見や見解など）を表す場合には、「普通形＋と思います」の形式で導入され、初出課は21課となっている【例文（14）】。また、疑問・疑いを表す形式は、文末に「か」を付加した形式で表され、1課で取り上げられている【例文（15）】。初級ではあまり観察できないが、話し手の疑いを表す表現として、「かな」や「かしら」なども挙げられる。そして、自分がある行為をする意志があることを聞き手に伝える際の意志表現は、31課で「意向形＋と思います／と思っています」、同じく31課で「動詞辞書形／〈ない形〉ない＋つもりです」の形式で導入されている【例文（16）（17）】。意向形自体が意志を表しているが、普通は「と思う」を付けて使われ、意向形が単独で使われた場合は、意志の意味では聞き手を意識しない独り言になる<sup>8</sup>。また、「つもりだ」は、その場の思いつきでやろうと決めたことには使えず、事前に決意が固まっている意志に対して使われる。

初級の学習項目を観察すると、初級では汎用性の高い表現を積極的に教え、中級以降で、話し手のより繊細な気持ちを表すような表現が見られるようになって考えられる。（下記に示した（14）～（17）は『みんなの日本語教え方の手引きⅠⅡ』からの引用<sup>9</sup>）

- (14) ブラジルがいちばん強いと思います。  
 (15) あの人はだれですか。  
 (16) 買い物に行こうと思っています。  
 (17) わたしはきょうからダイエットするつもりです。

#### 4.2 日本語教科書で見られる「かな」「かなと思う」

ここでは、日本語教科書で観察される「かな」「かなと思う」について触れる。4.1 同様、台湾の日本語学習者が使っている教科書を対象に、「かな」「かなと思う」の使用が認められるか、そして認められる場合は、どのような意味用法で使われているのか、その表現意図と表現効果について見ていく。以下に、本研究で使用した日本語教科書の情報を表3として載せておく。

表3：使用教科書

使用教科書	教科書名	教科書レベル
教科書 a	『大家的日本語初級 I II、進階 I II』 <sup>10</sup>	初級
教科書 b	『新文化日本語初級①②③④』	初級
教科書 c	『大家的日本語中級 I II III』	中級
教科書 d	『新文化日本語中級①②③④』	中級

表4は、初級・中級日本語教科書に見られる「かな」「かなと思う」の出現数を、表3で挙げた教科書を用いて調べた結果である。では、「かな」はどのような例文で、どのように提示されているのだろうか。用例の一部を(18)～(24)に挙げておく。(用例の後ろに記したアルファベットは、表3の使用教科書を示す。)

表4：初中級日本語教科書における「かな」「かなと思う」の出現数

	「かな」	「かなと思う」
大家的日本語初級	1	0
大家的日本語中級	20	8
新文化初級 (文化)	1	0
新文化中級 (文化)	25	2
合計	47	10

- (18) どうしようかな……。 (疑問 / a 20課・p18)  
 (19) セーターを編んであげようかな。 (意志 / b 28課・p18)  
 (20) 来週の土曜日はどうかな。 (提案 / c 7課・p20)  
 (21) そう。じゃ、無理かな。 (納得 / c 7課・p28)  
 (22) あの人が私の隣に来て「おはよう」と言ってくれないかな。 (願望 / d 6課・p60)  
 (23) 日本語だったら「笑う門に福来る」ってとこかな。 (判断 / c 13課・p32)

## (24) 1000円貸してくれないかな? (依頼/c 11課・p119)

「かな」の用例は、初級教科書では2例、中級教科書では45例見られた。初級段階では「かな」の出現はごく僅かであるのに対して、中級になると出現数が増えていることがわかる。2節で「かな」の用法について確認した際、「かな」は疑問を表す表現あるいは独り言の表現として扱われることが多いことを示したが、日本語教科書で見られる「かな」の用法でも多かったのも、やはり疑いを表す用法であった。しかし、中級以上になると、疑い以外の用例が観察できるようになる。本研究で観察できた「かな」の表現類型は、「提案」「依頼」「意志」「願望」「疑い」「納得」「判断」の7項目であった。各表現類型の使用数および使用率を、図3に示す。

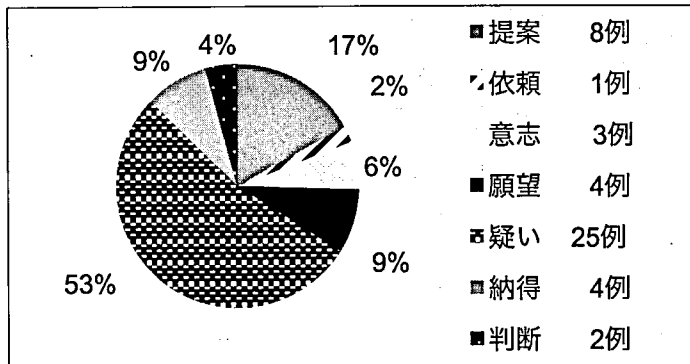


図3：日本語教科書で見られる「かな」の表現類型の使用数

次に、日本語教科書で見られる「かなと思う」について触れる。以前行なった調査<sup>11</sup>では、初級教科書を対象に用例の抽出を行なったことも一因となり、「かなと思う」の使用は認められなかった。しかしながら、本研究にて調査対象を中級教科書まで広げたところ、使用例は少ないが、『大衆的日本語中級』で8例、『新文化日本語中級』で2例の使用を認めることができた。「かなと思う」という表現が、現代社会で日常的に使われているだけでなく、日本語の教科書にまで取り上げられているという事実は、日本語教育において大きな意味があるだろう。下記(25)～(27)に実際に観察できた用例の一部を示す。(用例の後ろにあるアルファベットは、表3の使用教科書を示す。)

(25) それでひょっとしたら1251の人が聞いてくれるかなって思ったりして。(願望/c 18課・p182)

(26) 交流する人が増えることが国際化の第一歩なんじゃないかなと思うんです。(提案/d 8課・p127)

(27) スピーチのテーマ、ごみ問題にしようかなと思うんですけど。(意志/c 11課・p126)

『大衆的日本語中級』で「かなと思う」が観察されたのは、11課と18課のみである。11課は、人に質問したり、アドバイスを求めたりする表現について取り上げられている課であるが、「かなと思う」についてはとくに言及されず、会話文や練習のところで何気なく登場している。『新

文化日本語中級』では、8課で意見や感想を言う練習が取り上げられており、そこで「かなと思う」が観察できた。

日本語教科書で見られた「かなと思う」の表現類型は、「提案」「意志」「願望」の3項目であった。中でも、「提案」で使われている用例が多く、ついで「意志」「願望」と続く。各表現類型の使用率は、図4に示した。

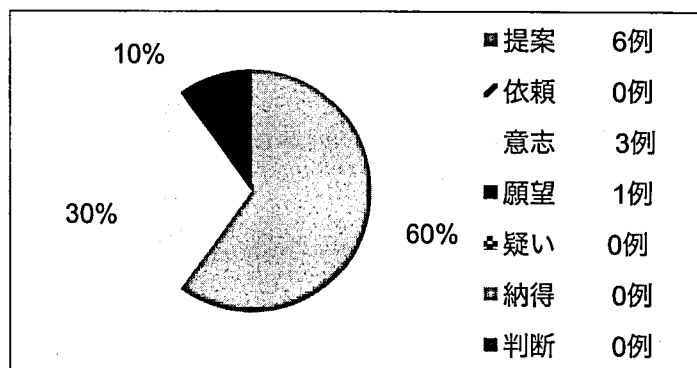


図4：日本語教科書で見られる「かなと思う」の表現類型の使用数

日本語教科書での「かなと思う」表現の使用はまだ少なく、10例程度しか観察できなかった。そのため、本稿 p94 の図2で示した「かなと思う」表現の使用実態と図4の日本語教科書との比較を通して、日本語教科書で取り上げられている「かなと思う」表現の特徴や問題点などの全体像を把握し言及することは、残念ながら現段階では難しい。しかしながら、本調査によって日本語教科書で見られる「かなと思う」表現の特徴、そして実際に使用が認められた「かなと思う」表現との異なる点について、一端を確認することができた。

BCCWJで実際に使用が認められた「かなと思う」の表現類型と、日本語教科書で見られた「かなと思う」の表現類型とを比較したところ、「提案」での使用例が使用実態および教科書共に多いという傾向が見られた。「提案」での使用に多く見られるというのは、このような発話場面で他者に対する自身の働きかけを弱めたいという心理が働くからだと考えられる。「かなと思う」には、他者への働きかけを弱める調整機能も含まれていると考えられるため、提案場面で「かなと思う」が選択されているのだろう。

そして、使用実態と日本語教科書とで差が見られたのは、判断の用法である。使用実態では、使用例の上位にあげられている「判断」の用法であるが、日本語教科書での使用例は観察できなかった。日本語教科書での用例数が少ないため、判断の用法がないという点が教科書の特徴および問題点だとはもちろん言えないが、少なくとも本研究においては、判断の用法で異なる結果が出たことは興味深い。また、判断以外にも教科書では触れられていない表現類型があるため、他の用法が取り上げられていない要因、そして、取り上げられていないことで何か問題が生じるかななどを明らかにする必要が出て来るだろう。その点については、今後の検討課題とする。

### 4.3 日本語教科書のまとめ

本調査から、「かなと思う」がすでに日本語教科書に提示されていることが観察できたが、使用数の割合はまだごく僅かである。また、「かなと思う」の表現類型の使用頻度と日本語教科書で観察された「かなと思う」の表現類型とで、観察できなかった用法も見られたが、「差異がある」と現段階で断定することは難しい。そのため、ここで見られた差異が、使用実態と教科書で扱われる表現の異なりおよび特徴であることを示すためには、さらなる追加調査が必要である。

今後考えられる追加調査としては、観察できた「かなと思う」の用例1280例すべてを表現類型ごとに分類することが挙げられる。また、日本語教科書での「かなと思う」表現を観察する際に、本研究では、台湾で使用されている日本語教科書を2種類取り上げたが、教科書での使用実態を把握するには十分とは言えない。そのため、他の初中級教科書にも範囲を広げて調査をする必要があるだろう。また、今後、「かなと思う」を日本語教科書で扱う場合は、現代社会でよく使われている表現類型と合致したものを積極的に取り上げていくことが必要になるため、使用実態についてもさらなる調査が求められる。

## 5. まとめと今後の課題

日本語母語話者が「かな」「かなと思う」と言った表現を多く使うようになっている背景には、他者との摩擦や衝突を避けるための対人関係の調節という役割が見られる。もちろん、既習の学習項目にもこのような効果が含まれているが、断定を避ける表現を重ねた「かなと思う」を使うことによって、聞き手や自己への配慮を示そうとしたり、他者との意見相違を最小限にしようとする話し手の情意が、より強く表せるといえる。このようなことから、「かなと思う」は配慮表現としても機能していることが言え、既習の表現だけではなく、一つのまとまった表現として「かなと思う」を学習者も理解しておくべき必要があるのではないかと考えている。日本語学習者自身が使用表現として積極的に「かなと思う」を使用するかどうかは、個々の判断に任せれば良いが、日本語母語話者と接したり、日本社会で生活したりする場合は、少なくとも「聞いてわかる」必要があるだろう。

また、日本語教育で「かなと思う」を扱う場合、どの段階で「かなと思う」に触れるべきかという点が焦点になってくるが、初級レベルでは様々な「かな」の用法を示すだけに留め、中級以降で「かなと思う」を扱う方が効果的に導入できるのではないだろうか。その仮説を立証するためには、さらに「かなと思う」の使用実態および使用状況をより詳細に観察する必要があるだろう。その上で、日本語教育で効果的かつ効率的に「かなと思う」表現を示す方法を探ることを今後の課題とする。

### 参考書目

#### 【引証論文】

- 小野正樹 (2006) 「新しい文法—「かなと思う」について—」『日本語学』第25巻第9号, 明治書院, p46-p56  
熊井浩子 (2014) 「文末表現「カネ」の用法について—Politenessの視点から—」『静岡大学国際交流センター

紀要』第8号, p1-p27

熊野七絵 (1999)「文末の『かね』の意味・機能—「疑いの表現」としての位置づけ—」『広島大学留学生センター紀要』10, p31-p41

鈴木智美 (2015)「意見表明に用いられる「かなと思う」—対立・摩擦を避け内に向かう言葉—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41, p61-p78

平山紫帆 (2015)「自然会話における終助詞「かな」の用法」『日本語教育実践研究』2号, p68-p79

三宅知宏 (2000)「疑念表明の表現について—カナ・カシラを中心に—」『鶴見大学紀要 第1部 国語・国文学編』第37号, p8-p21

横田淳子 (1998)「「～と思う」およびその引用節内の動詞の主体について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24, p101-p117

渡邊ゆかり (2010)「国会会議の発言中に現れる意向・意見・見解表明文の変遷—「と思います」「というように／ふうに」思います」の交替—」『広島女学院大学国語国文学誌』40, p1-p18

#### 【参考 URL】

石井郁江 (2016)「意志や願望を表す「かなと思う」の使用実態—国会議事録の分析を中心に—」2016年 ICJLE バリ大会 (日本語教育国際研究大会) 予稿集

[http://bali-icjle2016.com/wp-content/uploads/gravity\\_forms/2-ec131d5d14e56b102d22ba31c4c20b9c/2016/07/Ikue-Ishii\\_discourseproceedings.pdf](http://bali-icjle2016.com/wp-content/uploads/gravity_forms/2-ec131d5d14e56b102d22ba31c4c20b9c/2016/07/Ikue-Ishii_discourseproceedings.pdf)

鈴木智美 (2014)「対立・コンフリクトを避け内に向かう言葉—「かなと思う」の意味と使用—」2014年日本語教育研究集会 予稿集

[https://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu7\\_folder/symposium/pdf/12/10.pdf](https://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu7_folder/symposium/pdf/12/10.pdf) 国立国語研究所 現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

#### 【辞典・指導書・参考書】

グループ・ジャマシィ (1998)『日本語文型辞典』くろしお出版

白川博之監修 (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク編 (2000)『みんなの日本語初級 I 教え方の手引き』

スリーエーネットワーク編 (2001)『みんなの日本語初級 II 教え方の手引き』

文化庁 (1990)『外国人のための基本語用例辞典』大蔵省印刷局

松岡弘監修 (2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

メイナード・K・泉子『談話表現ハンドブック』くろしお出版

#### 【日本語教科書】

大新書局『大家的日本語初級 I II』、『大家的日本語進階 I II』、『大家的日本語中級 I II III』

大新書局『新文化日本語初級①②③④』、『新文化日本語中級①②③④』

#### 註

1. NHK「クローズアップ現代+」「助けてと言えなくて～女性たちに何が～」(2015年11月24日放送)にゲスト出演していた東京女子医科大学教授・加茂登志子氏のコメント。
2. 国会会議「災害対策特別委員会」(2006年11月7日)における高橋千鶴子議員の発言。
3. 参考書や指導書の場合はタイトルで示し、論文の場合は著者名で示した。
4. 使用率については、BCCWJに収録されている全データ数にて算出することが望ましいが、BCCWJのデータ数は1億語を超えるため、本稿では、抽出できた1280例の「かなと思う」をもとに、各年代の使用率を算出するに留めた。
5. 2000年代以降で追加された新ジャンルでの使用例は634例であり、2000年代以前と共通するジャンルでの使用例は432例であった。そのため、新ジャンルを除外したとしても、「かなと思う」の使用例が年代を

追うごとに増えていることがわかる。

6. 熊野 (1999) では、「かね」と「かな」に対応関係があるとし、「かね」「かな」を対応させて表現類型の分類を行っている。本研究でも、熊野の主張を支持し、「かなと思う」の表現を分類する際の参考にした。(「かな」「かね」の使い分けに関しては明らかにされておらず、共通の特徴と対応関係があるという説明に留まっているため、本稿でも「かな」と「かね」の関係については扱わない。)
7. 本研究では、抽出できた1280例すべてを意味分類の対象とはせず、一部を分析対象とした。対象にしたのは、2008年のデータ247例で、これは BCCWJ で用例の出版年検索が出来る新しい年である。
8. 松岡監修『初級を教える人のための日本語ハンドブック』(2000) を参照。
9. 『みんなの日本語 教え方の手引き』は、『みんなの日本語』の内容に沿って作られた教師指導書である。
10. 台湾地区用に発行・販売された『大家的日本語』は、初級Ⅰ、初級Ⅱ、進階Ⅰ、進階Ⅱの4冊が初級用教科書になっている。(冊数は異なるが、原書『みんなの日本語初級』と課数および内容は同じ。)
11. 日本語教育国際研究大会 (2016年9月10日) において口頭発表した際の調査研究。